

子とする御霊による靈性

水草修治

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父。』と呼びます。」(ローマ 8:15)

はじめに

「靈性」という用語が伝統的に担ってきた固有の内容は、普遍的理論や教理体系ではなく、実存における具体的実践である。佐久間勤はズードブラックのこばを引用して、「靈性とはキリスト教の本質、キリストの救いの客観的な神秘が、歴史的、文化的に異なる具体的な状況で生きられたもの」であるとしている¹。また、百瀬文晃は「靈性とは、一人一人のキリスト者がどのようにイエス・キリストの福音を受容し、その信仰の行き方をどのように具

体的に実践するか、その具体的な信仰の営み方、信仰の実現様式だ」という²。

そこで筆者は、「靈性」ということばが担ってきた実存的・具体的・実践的課題のうち、特に義認と聖化の葛藤という問題の解決を目指して、キリスト者の靈性に考察を加えたい。

ただ、「靈性」ということばが異教的文脈においても広く用いられている現代的状況を鑑みると、キリスト者の靈性の考察に入る前に、まずは、異種の靈性との区別についての考察が必須であろう。そこで、本稿では、前半二つの項で異種の靈性との区別について明らかにし、後半の二つの項で、「子とする御霊」を軸に据えて、キリスト者の靈性について考察を進めたい。前半と後半とをつなぐ絆は、「御子イエスの御霊」である。

I. ナザレのイエス・キリストの御霊：異種の「靈性」との区別

かつて人類に進歩の夢を与えた近代合理主義は、核戦争による滅亡の危機・環境破壊・人間存在の無意味化という結果をもたらしたことによって、すでに信用を失って久しい。その反動で、今日、諸宗教や宗教的多元主義者がこぞって「靈性」という用語で語り始めている³。キリスト教界にも、広く

² 「神学と靈性」『キリスト教の神学と靈性』所収(サンパウロ、1999年)248頁。さらに山岡三治「フォン・バルタザールによれば、靈性のあり方は、実際的あるいは実存的であり、その人が自分の宗教的実存を実現するような考え方の結果であり、表現である。それゆえ彼の生き方の行動的かつ恒常的な決断となる。」(“Spiritus Creator”1967)「J. ヴァイスマイヤーは、『靈性神学は教義神学(キリストの使信を対象化する学問)と倫理神学(規範の面の強調)と区別される。つねにキリスト者の具体的な生活が考察されるべきもの』であり、『たしかに靈性神学は組織神学の一部であるはずだろう。しかしそれは靈性神学の<体系>の発展を意味するのではない。・・・靈性神学はむしろキリスト者としての実存の根本的問いを扱うべきであろう。』(“Theologie der Spiritualitaet”1975; 山岡三治 <http://pweb.sophia.ac.jp/~s-yamaok/sprt00-00.htm>)

³ たとえば鎌田東二『神道とは何か—自然の靈性を感じて生きる』、川上光正『潜在意識の解明—潜在意識から超潜在意識へ 魂性意識と靈性意識を解く』、野島芳明『文明の大潮流—近代的知性から宇宙的靈性へ』、J. ヒック『魂の探求—

¹ 佐久間勤「旧約聖書における霊の働き—アブラハムを例として」『キリスト教の神学と靈性』所収(サンパウロ、1999年)、19頁。Sacramentum Mundi, IV, 676.

はニューエイジ・ムーブメント、狭くはキリスト教エキュメニズム運動を介して、異種の靈性が侵入しつつある。

諸宗教や宗教的多元主義の神学者たちの「靈性」とは、ひとことで言ってしまうと汎神論的靈性である。汎神論的靈性における救いとは、個我が、「世界靈」と融合・合一し、神的存在になることを意味している。「世界靈」は、ウパニシャッド哲学においては「梵」、ネオプラトニズムにおいては「一者（ト・ヘン）」、地球環境に関心深いニューエイジ・ムーブメントにおいてはギリシャ神話の大地母神「ガイア」、宗教的多元主義神学においては「究極的実在」、トランスパーソナル心理学においては「超潜在意識」などと呼ばれているが、本質的に同質のものである⁴。

キリスト者の靈性と異種の靈性との区別の第一のポイントは、キリスト者の「靈性」において、人の霊を革新する神の霊とは、「『アバ、父』と呼ぶ御子の御霊」（ガラテヤ4：6）すなわち「子とする御霊」（ローマ8：15）であるということである。聖霊はナザレのイエスとして受肉した御子の御霊であるという事実の認識が、異種の靈性との区別のためには決定的に重要なのである。キリスト者の靈性における神の霊とは、諸宗教に共通する漠然とした「世界靈」や「究極的実在」などではなく、歴史の中にナザレのイエスという具体的なお方として受肉した御子の御霊なのである。

ここで重要なのは「ニカヤ・コンスタチノポリス信条」におけるフィリオクエ条項、つまり、聖霊は父のみならず「子からも」出たという点である。というのは、「父から出た聖霊」という表現で、被造物にいのちと秩序を与えた神の霊を指すだけでは、聖霊と汎神論的「世界靈」との区別がいかにも不明瞭だからである。父から出て万物を創造した聖霊は、現実の歴史の中に、あのナザレのイエスとして受肉した御子の霊であることが、聖霊と汎神論的「世界靈」との識別の鍵である。

東方教会のフィリオクエ否定論に親近感を抱くJ.モルトマンは、地球規模の環境保全に神学的視野を拡大しようという意図から、「神の大地の聖なる

こと」「『産み出す母』としての大地」を強調している⁵。その論述は慎重で誤りとは即断しがたいが、聖霊と汎神論的「世界靈」との区別性をあいまいにしていることに関しては批判されるべきである。聖書は、この世の霊と神からの霊の区別を明確にせよと命じているからである。その識別法とは、グノーシス主義について警告を発しているヨハネの手紙第一が言うように、ナザレのイエスとして受肉したキリストを告白するか否かということにはほかならない。

「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。」（1ヨハネ 4：1—3）

キリスト者の靈性と異種の靈性との区別の第二のポイントは、「御子の御霊」による靈性においては、人は「神になること」を目指さないで、本来的な「（神のかたちである）人になること」を目指すということである。

ところで、東方神学では、キリスト者の靈的成長を意味する用語として「神化（テオーシス）」という語が用いられる。正教の司祭高橋保行は次のように言っている。「（神化とは）神が人となったことにより、人間性が完全に神と交わりをもち、神の命にあずかれるようになったことを意味する表現である。神が歴史的な人間イエスとして生まれることによる具体的に神化された人間性が、この世に生まれてくるひとりひとりの人間性となったのはすでに述べた。人がこの事実を目さめ、イエス・キリストの生活形態をとりはじめるとき、今度は人の人生の中に神化された人間性が実際に、具体化されていき、聖人とよばれる者が生まれてくるのである。⁶」

正教では、「神化された人間性」というのは、「神化」されても人間性は人間

—靈性に導かれる生き方』など。

⁴ 水草修治『ニューエイジの罫』（CLC、1993年）、第三章参照

⁵ J.モルトマン『いのちの泉』蓮見幸恵訳（新教出版社、1999年）、44—46頁

⁶ 高橋保行『ギリシャ正教』（講談社学術文庫、1980年）、275頁

性であり、神に吸収されるわけではないとされるから⁷、これを汎神論的靈性における救済観と同一視すべきではない。しかし、汎神論的思想のはびこる今日の状況にあつては、「神化」はいかにも誤解を招きやすい表現である。事実、汎神論者のうちには「進化は神化である」と語る人々がいる。また赤木善光は「聖化」「靈化」「栄化」「神化」を宗教的救いの同じ段階を表わすと言っているが⁸、いかがなものだろうか。そもそも原罪思想のない東方神学の救済論の体系⁹と、原罪論を救済論の根底に据える西方神学、格別、宗教改革の伝統に立つ福音主義神学の救済論の体系を安易に重ね合わせて辻褄が合うのだろうか¹⁰。

子とする御霊による生とは、人があくまで人としての分に止まりつつ、神の養子とされた者として、神のご性質に与かることである。それは、サタンがかつてアダムを誘ったように思い上がって<神に反逆して、自律して、神のようになること>を意味するのではなく、<神の支配の下で聖霊により、「神のかたち」すなわち「キリストのかたち」に変えられる¹¹こと>を意味する。

⁷ Symeon Lash 「神化された被造物はそれ自身でありつづけ、その個性を保つのであるから、神化は神に吸収されることを意味しない。」(A.リチャードソン、『キリスト教神学事典』(教文館))

⁸ 赤木善光『聖化』(東神大出版会 1975年)、23頁

⁹ 高橋、同上書、260-261頁：「墮落の罪は人の行為により生じるとするの、アダム以来人の性質に本来あるという西のキリスト教の原罪の考え方はギリシャ正教にはない。・・・人が墮落するのは、つねに自分の意志により、神に背を向ける行為や生き方に自分をゆだねるからである。人の罪は、このようにしてひとりひとりの人間が、人生の中で墮落の行為をとるときに生じる。」また、「神の怒りにふれた人間は、苦勞と病氣と死が避けられぬ運命となりました。この結果、悪の甘味が人の心を善よりも悪へ走りやすくさせてしまいました。悪は神から来るものではなく罪から生まれるものです。」(『正教要理』、1980年、39頁)

他方、西方教会での原罪とは「人が人類の一員として生まれてくることそれ自体によって、罪深い行為への傾向性、再生を必要とする『腐敗した』性質を受け継いでくるとする教理」である(リチャードソン、上掲書、Bruce Vawterによる)。

¹⁰ 牧田吉和、同上論文Ⅱ-2「宗教改革の伝統に立つ福音主義神学においては、墮落の根源的深さの点から人間の靈的無能力性がまず確認されなければならない。」

¹¹ 2コリント3：17-18参照

御子は御父と瓜二つなので、御子に似ることとはすなわち御父に似ることであり、「神のかたちである人」として新たに創造されることである。

では、なぜ最初の人アダムが「神のようになろう」としたことは、思い上がりの罪に当たり、我々がキリストに似ることによって神に似た者になることは、思い上がりに当たらないのであろうか。それはキリストにあつて、神が受肉されたからである。神が受肉されたということは、神が墮落の影響を受けていない本来的な「神のかたち」である人間性をまとわれたことを意味する。このようにキリストの受肉によって、人間が人間であることを捨てて神のようになるのではなく、人間が人間としての分に留まりつつ神に似た者つまり「神のかたち」になる道が開かれたのである。キリストはまったき神であり、かつ、まったき人であるからである。

御子は、人間性をまとして神の家族の長子となられた¹²。御父は、御子イエスに結ばれたキリスト者たちの群れつまり兄弟姉妹に「御子の御霊」を与えてくださった。だからキリスト者の品性には、父のみむねに従って栄光の御座を捨て、十字架の死にまで従われた御子の謙遜という品性が反映するはずである。アウグスティヌスは、若い日にマニ教に傾倒していたが、まず新プラトン派の書物によってマニ教の迷妄から解放され、さらに、罪の悩みの淵でキリストを受け入れて回心した。彼は新プラトン派の哲学を、他の哲学と別格のものとして高く評価しているが、同時に、聖書との決定的違いをも認識している。彼は、自らの回心の過程を振り返って、新プラトン派の書物と聖書を比較して、両者は栄光に満ちた天的ロゴス論においては共通するが、ロゴスの受肉と謙遜はただ聖書にのみ見出されたといっている¹³。

ゆえに、子とする御霊による靈性のもたらす品性の特質は、高ぶって支配することよりも謙遜に仕えることに喜びを見出すことである。それは、自己実現・自己完成・自己神化とは正反対に、神の御旨の実現・御国の完成・神にのみ栄光を帰するという方向性を持つのである。

¹² ローマ8：29

¹³ アウグスティヌス『告白』第七卷9章13、14

II. 異種の靈性における祈りとの区別——ことばの問題

靈性を具体的・実践的に取り上げる上で、祈りについての考察が不可欠である。祈りは生ける神との交わりの最も具体的な実践の一つだからである。主は、異教徒の祈りと神の子どもたちの祈りがいかに違っているべきかについて次のように教えてくださった。

「また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」(マタイ 6:7-8)

汎神論的靈性においては、個我が「世界靈」と一体化するために、ことばを超えることが強調される。通常のことばは知性をもって物事を弁別する機能があるので、「世界靈」と個私の区別を超えるためにはむしろ妨げとなるからであろう。禅では「不立文字」と言われ¹⁴、鈴木大拙は「精神は分別意識を基礎としているが、靈性は無分別智である¹⁵」と主張し、プロティノスは、個我が「一者」と合一するとき、「一者」を見るはたらきは「もはや論理ではない。むしろそれは論理以上に大なるものであり、論理に先立ち、論理の上に君臨するもの¹⁶」と主張している。

したがって、異教において繰り返される同じことばは、通常の意味でのことばではない。カルメル山のバアルの祭司たちの熱狂的な呪文や、日蓮宗の題目や、ある種のロック・ミュージックの熱狂的叫び¹⁷は、何のために繰り返されるのか。様態は異なるが、その目的は静寂な観想と同じく自己が「世

界靈」と合一するために、ことばを超えることにあると考えられる。意味も無くただ繰り返される呪文は意思疎通のためのことばではなく、むしろ知性の判別力を麻痺させるための「音」にすぎない。

これは、ことばを神と人との間の理解をとまなう人格的交流の方法としている主イエスの教えとは決定的に異なる点である。神は理解できることばをもって我々に聖書啓示を与えられた。また、主は祈りにおいて異教徒のように無意味に同じ言葉を繰り返すなどおっしゃった。聖書によれば、神と人との間には無限者と有限者という質的区別があるが、同時に、神は人をご自分のかたちとして創造し、かつ人に適合して理解可能な方法で啓示を与えてくださっている。かつてフランシス・シェーファーが、＜汎神論化した自由主義神学に対して、福音主義者が主張すべき点は聖書における命題的啓示である＞と繰り返し強調したことを、我々は今一度、想起すべきである。

ソドムのため主に対してとりなすアブラハム¹⁸、頑ななイスラエルの民のために執り成すモーセ¹⁹……そこには、神と人との区別と対話がある。聖書における神との格闘的な対話ともいべき祈りは、個我と「世界靈」との融合を説く汎神論的靈性における観想や熱狂とは異質の「ことばによる祈り」である。

キリスト者の祈りは、その結末において、「御心がなりますように」と、己の意思を御父の意思と一致させるべきであろう。しかし、それは汎神論的靈性における神と人との存在の融合のようなものではなく、責任ある主体として服従することである。考えてもみよ。主からソドムへの審判を予告されたとき、もし、アブラハムが即座に「どうぞご随意に。」と従順に祈ったなら、御心にならなかったであろうか。イスラエルが金の子牛を作ったとき、主はお怒りになってイスラエルを絶ち滅ぼしてモーセを偉大な国民にしようとおっしゃったが²⁰、もし、あときモーセが「どうぞ、どうぞ。」と言ったならば、御心になっただろうか。否。かえって神を失望させたであろう。そのよう

¹⁴ 「不立文字」(ふりゅうもんじ) = 「以心伝心」とともに、禅宗の立場を示す標語。悟道は文字・言説を以て伝えることができず、心から心へ伝えるものであるの意。『広辞苑』

¹⁵ 鈴木大拙『日本の靈性』(岩波文庫、1972年) 17頁

¹⁶ プロティノス『エネアデス』VI, 9-10.

¹⁷ バジレア・シュリンク『ロックはどこから?』(マリア福音姉妹会 1993年) 参照

¹⁸ 創世記 18:23-33

¹⁹ 出エジプト 32:31-32

²⁰ 出エジプト 32:10 参照

な祈りは従順ではなく柔弱であり、神の真の御心を悟らぬ鈍さにすぎない。神は、アブラハムが約束の地の相続人として、モーセがイスラエルの指導者としてどれほどの覚悟を持っているかを試されたのである。

主イエスは、娘の救いを求めて訪れたカナン人の女に、「子どものパンを取り上げて、子犬に投げてやるのはよくない」と追い払おうとされた。そのとき、女はあきらめて去らないで、「子犬でも食卓の下の子犬でも、子どもたちのパンくずをいただきます。」と主イエスに食い下がった。そのとき、主イエスは、彼女の信仰をほめたではないか²¹。

一見、神の御心に抗うような祈りこそ、御心にかなう祈りであることがある。P.T.フォーサイスによれば、単なる瞑想や交わりや静寂主義者が理想とする従順な祈りは、むしろ異教的起源のものであり、神との格闘こそ聖書的な祈りの本性なのである²²。「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。」(ヘブル5:7)

神と人との間には創造主と被造物という区別はあるものの、ことばによる対話・対決が可能であるということは、祈りに関する重要な聖書の真理である。聖徒たちは意味あることばをもって神に叫び、神は人に、「来たれ、さあ論じ合おう」と呼びかけたまう。もちろん神との交わりは、対決ばかりではない。エリヤが、王妃イゼベルから逃亡したとき、主は彼を肉体的にも癒し慰め、細い声をもってお語りになった。静かな対話である。しかし、これも汎神論における個我と究極的実在との融合ではなかった。ここには、呪文もなければ不立文字的瞑想もなく、人格と人格との理解可能な対話がある。それはまたプロティノスの瞑想とアウグスティヌスの祈りの違いでもあった。アウグスティヌスの『告白』は一見、新プラトンの文体に見えるが、あのように親しい神との会話は、プロティノスには決して見られないものなのである²³。

²¹ マタイ 15:21-28 参照

²² P. T. フォーサイス『祈りの精神』(ヨルダン社、1969年) II 「ねばり強い祈り」参照

²³ P.ブラウン『アウグスティヌス伝 上』(出村和彦訳、教文館2004年)、172

聖書の靈性における祈りの特質は、理解可能なことばを伴う人格的交流なのである。

III. 子とする御霊は、義認と聖化の葛藤に解決を与える——「放蕩息子の譬え」

次に、我々はキリスト者の成熟過程においてしばしば生じる「義認と聖化の葛藤」という事態と、「子とする御霊」による靈性がこの実存の葛藤に解決をもたらすことを考察し、続く章では、「子とする御霊」による靈性が、さらに教会と世界への広がりにおいてもいかに有効かを見てみたい。特に、有力な手がかりとなるのはルカ伝の「放蕩息子の譬え」である。

1) 義認と聖化の葛藤

J.I. パッカー²⁴が指摘するように、子とすることの教理は救済論の中心であるにもかかわらず、神学の歴史においては不当に軽んじられてきた。たとえば、ウェストミンスター信仰基準は、告白、大小教理問答ともに、「義とすること」と「聖とすること」とともに「子とすること」を、有効召命を受けた信徒がこの世で受けるおもな祝福として数えているにもかかわらず²⁵、その後の改革派神学の展開の中でこれが主題的に扱われることはまれであった。

パッカーは、チャールズ・ウェスレーが1738年の聖霊降臨日に経験した内容は「奴隷から子としての身分への変化」であったと指摘し²⁶、「クリスチャン生活の全体は、子とされることから理解されなければならない」²⁷とまで主張している。また、H. ナウエンの生涯における決定的に重要な靈的経験も、「子とされた恵み」であった。ナウエンは自分自身を、放蕩息子の帰還の譬えに登場する二人の息子たちに重ねて、克明にそして実存的に語ってい

—173 頁参照

²⁴ J.I. パッカー『神について』(山口昇訳、いのちのことば社、1973年)、371 頁参照

²⁵ 日本基督改革派教会信仰基準翻訳委員会訳、1958年版

²⁶ J.I. パッカー、同上書、374 頁参照

²⁷ J.I. パッカー、同上書、377 頁参照

る²⁸。キリスト者の霊性を追求する我々は、御子の御霊を受けて神の子とされたという偉大な恵みについて、今一度みことばを味わう必要がある。

「子とすること」が義認と聖化ほどには十分に考察されることがなかった結果、義認と聖化という両教理の間には常に葛藤があったと考えられる。赤木善光がまとめているところを参照すれば、義認と聖化を巡る問題点は少なくとも二つある。

義認と聖化をめぐる問題点の第一は、聖化をへたに強調すると、律法主義や自己義認に陥る²⁹ということである。というのは、義認は罪人が罪人であるままで神の御前に義とされることであるのに、聖化が実質的な罪性からの解放を意味しているとする、聖化によって実質的に罪性が減るとともに義認の意義が薄れることになってしまうからである。

第二点は、聖化が罪性から実質的にきよめられたという意味であるとすれば、それは個々の体験にかかわることなので、その信仰はえてして個人主義的・主観主義的になって、人を自意識過剰や傲慢にさせ信仰共同体との交わりを破壊ないし軽視するものになってしまう傾きがあることである³⁰。

2) 奴隷から子へ

さて、パウロは、キリスト者はすでに義認の恵みに与かりながら、「再び恐怖に陥る」ような奴隷的な自己認識を持つ場合があると告げている。

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてください。御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父。』と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいませ。」(ローマ 8:15-16)

奴隷的な自己認識を持つ人は、自分には神に愛されるような価値はないと見限ってしまう。ルカ福音書 15 章に記された放蕩息子が帰還にあたって準備した「もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとり

にしてください」³¹というせりふに表われている、一見殊勝で実は卑屈な自己認識である。この奴隷的な自己認識は、キリスト者の生き方に両極端の過ちをもたらす。

一つは、奴隷的な自己認識を持つキリスト者は霊的怠惰に陥ることである。「私は奴隷でもう十分。子どもにしてもらおうなどというおこがましい期待はしていないし、子どもなんてかえって親の期待に応えるのが大変そうだ。」という姿勢である。弟息子が父にわびるためにあらかじめ用意したあいさつのことばは、一見すると謙虚そうに思えるし、本人も謙虚なつもりなのだろうが、H. ナウエンに言わせれば、ここには実は自己保身がないまぜになっている³²。「罪赦されて雇い人のひとりになれば、とりあえず衣食にはありつけるだろうから、それで十分。それ以上、自分は父の期待するような人間に変われるはずがないし、変わるのには面倒である。」という傲慢で怠惰な態度が含まれているというのである。言い換えれば、「義認で十分、それ以上の聖化は期待しない。」という霊的怠惰である。このように義認の教理はキリスト者に法的客観的に救いを確信させる力を持つが、聖化への前進を促す力に欠けるのではないかという疑念がある。

もう一つの過ちは、律法主義・成果主義という罠に陥ることである。自分が神の奴隷であると思っているキリスト者は、働きが悪ければ自分は神に捨てられるのではないかという恐怖を胸のうちに抱いている。その恐怖から目をそらすために、懸命に働き、それなりの「目に見える成果」を手に入れて満足しようとするが、それでは、たましいに本物の平安を得ることは決してない。それは律法主義・成果主義による自己満足にすぎないからである。その結果、奴隷的な自己認識に留まっているキリスト者の心の淵には、他人にも時には自分自身にも隠しているが、神への憎しみが宿ることある。彼が働いても働いても、いつも不機嫌な眼差しで、「なぜもっと勤勉に働かないのか」とにらみつける「神」への憎しみである。

それはルターが信仰による義を知る前に経験したのと同質の憎しみである。

²⁸ H.ナウエン『放蕩息子の帰郷』(あめんどう 2003 年)、66 頁参照

²⁹ 赤木善光、前掲書、12 頁参照

³⁰ 赤木善光、同上書、17-18 頁参照

³¹ ルカ 15:19

³² H.ナウエン『放蕩息子の帰郷』(あめんどう、2003 年)、72 頁参照

ルターは次のように述懐している。「しかし私は、義にして罪人を罰する神を愛さず、むしろ彼を憎んでいた。なぜならば、私は非の打ちどころのない修道士として生きてきたにもかかわらず、神の前で自分が良心の不安におのく罪人であると感じ、私の償罪の行いによって神と和解している、と信ずることができなかつたからである」³³。

また、律法主義は人から自然的情愛さえも奪ってしまう。律法主義者にとって、律法こそ神であるから、律法を遵守できないような者は無価値な呪われた者であからである。まして何の働きもない者が、神の愛を受けるなどということは、律法主義者の目にはあるまじきこととして映る。

放蕩息子の生真面目な兄がこの典型である。兄息子は、父親に対して「ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。」と己の律法遵守による義を主張し、「その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません」³⁴と自己憐憫に浸り、父親を激しく非難している。そのくせ彼は、今まさに、自分がどれほど父に非礼なことばを吐き、父の心に刃を突き立て、「あなたの父母を敬え」という戒めをひどく破っているかということには気づかない。形の上では律法を守っているが、その根本精神である愛を見失ってしまっているのである。律法的宗教人は、えてしてうわべの成果、律法の形式的遵守に固執するあまり、その実質を見失いがちなのである。

さらに兄息子は血のつながった自分の弟のことを父親に向かって「あなたの息子」と呼んでいるように³⁵、アガペーどころか肉親としての自然的情愛（ストルゲー）さえも失って、「情け知らず（アストルゴス）」になっている。

自分を奴隷だと思っている生真面目なキリスト者は、神は成果の上がない自分を見捨てるのではないかという恐怖から逃れるために、律法主義・成果主義・仕事依存症に罹って、結局、信仰によって義と認められたという恵みと、

自然的情愛さえも失って燃え尽きてしまう³⁶。なんといたましいことであろう。

このように奴隷的自己認識は、靈的怠惰または律法主義への逆行という両極端の過ちをもたらす。これらの罟を逃れるためには、我々は何を知る必要があるのだろうか。神がくださった恵みのうちの何を、奴隷的自己認識の中にあるキリスト者は見落としているのであろうか。

放蕩息子の譬えに戻ろう。父親は二人の息子に何をしただろうか。

ある日、年老いた父の目に、畑の道をこちらに向かう人影が映った。ぼろをまとった男が、肩を落として畑の道をこちらに歩いてくる。まぎれもない。何年も前に出奔した弟息子である。そのとき、父は威厳などかなぐり捨てて息子に走り寄り、豚の糞尿の染み付いた衣をまとっていることを気にも留めずに抱きしめ、口づけしてやまなかった。父の腕の中で息子は、「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」と用意しておいたセリフを言おうとするが、父は、最後までは言わせない。父は、息子に一番良い着物を着せ、手に相続人の証である指輪をはめさせ、奴隷でないことの証として足に靴をはかせたのだった。これらは、父の愛の証であり、「お前は、雇い人ではない。わたしの愛する息子だ。」という証にほかならない。靈的な怠惰の根本原因は、父の愛への不信であり、これを解決するのは、威厳を捨てて罪深い息子に駆け寄った圧倒的な父の愛であった。

放蕩な弟を歓迎する父を非難したのは兄息子だった。兄息子に対しては、父はどう対処しただろうか。父は、兄息子をいろいろなだめ、「おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」と語る。やはり父は、自分の

³³ 『『自然の情愛に欠けている者』(アストルゴス)の背後には「ストルゲー」という、たとえば親子の間に見られるような、生まれつきの愛情を表現する言葉があり、これが欠如している人、つまり人間らしさを失っていることが、ここで指摘されているのである。律法的宗教人にこういう類型の人がよく見かけられる」(高橋三郎、『新稿ロマ書講義上』山本書店1983年、102頁)。

³³ 『原典宗教改革史』(ヨルダン社、1976年)、24頁

³⁴ ルカ 15:29

³⁵ ルカ 15:30

威厳を横において、兄息子にも、「お前はわたしの愛する息子ではないか」と語りかけるのである。また、「あなたの息子が」と言い募る兄息子に対して、「『おまえの弟』が帰ってきたことを喜ぶのは当然ではないか。」と指摘して、律法主義の罠に陥った兄息子が人間として当然持つべき自然的情愛さえも失っていることを悲しんでいる。切々たる父の言葉には、兄息子の非情さに対する悲しみと憤りと愛とがないまぜになって見事に表現されている。

結局、「放蕩息子の譬え」において、主イエスが教えられた奴隷的自己認識に対する解決は何か。それは第一に父が自らの威厳をかなぐり捨てて子のところまでへりくだったという愛の行為である。この父の遜りは、キリストにあって神が人となられ、かつ、我々の贖罪のために十字架の死にまで従われた、あの愛の行為を指差している。解決の第二は、父は「子としていただく資格などありません」という息子の手に確かな相続人の印である指輪をはめてやったということである。この行為は、神が御子を信じる者に、子としての立場と「子とする御霊」注いでくださる事を指差している。我々はいっさいの疑いを捨て去って御父の愛を信じなければならない。我々は義と認められたこととともに、神の子とされたという恵みを十分に理解し、信じ受け入れなければならない。

この神の愛に満ちた行為を、義認・聖化・子とすることという三つの恵みの関連に注目して整理してみよう。義認は救いの法的客観的側面を表わし、聖化は実質的主観的側面を表わしている。両者の間に矛盾・緊張があるのだが、子とする恵みは、両者を媒介してこの矛盾を解決する。なぜなら神が、キリストにあって、我々を子としてくださったという恵みには、法的客観的側面と実質的主観的側面とが、同時に含まれているからである。

神は、審判者として罪ある我々にキリストの義を転嫁して、義と宣告してくださった。しかも、我々を単なる奴隷として雇ったのではなく、父として、法的客観的に我々を子として迎えてくださったのである。神は主人として、信徒を「働き」のみでその価値が量られる奴隷として雇いたまうのではない。神は、父親として、何よりも子とされた我々の「存在」を喜んでくださるのである。

しかも、神の子とされることには靈的実質的内容が含まれる。人が孤児を

養子として迎える場合は、残念ながらもう一度母の胎から新たに生み出すことはできないが、神が我々を子とする場合は、法的に養子とするのみならず、実質的に子とする御霊による新生をも伴わせてくださる³⁷。だから、我々は「子としてくださる御霊」を受けて、「アバ父」と呼ぶことができる³⁸。

神が我々を「子とする」というこの行為が、我々を靈的怠惰と律法主義という罠から解放する。キリスト者は、義と宣告されたばかりか、子として愛されているという喜びを、革新された霊によって味わいつつ、御父に服従するのである。

また、父の子に対する期待は、主人の奴隷に対する期待よりもはるかに大きいであろう。子は相続人だからである。しかも、健全な父子関係においては、子は、罰に対する恐怖からではなく、むしろ父の愛に対する喜びから自発的に父に服従するものである。そのように、子とされた喜びを知るキリスト者は、自発的に聖化の道を邁進するであろう。新約において、父なる神のご自分の子に対する期待は、旧約における主なる神のご自分の奴隷に対する期待よりもはるかに大きい。旧約が「盗むな」といえば、新約は「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをするため、自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。」と命じ、旧約が「偽証をするな」といえば、新約は「偽りを捨て真実を語れ」と命じる³⁹。いわば、旧約が「1 ミリオン行け」と命じるならば、新約は「2 ミリオン行け」と命じるのである。奴隷たちは重い足を引きずって1 ミリオン行くが、子どもたちは喜び勇んで2 ミリオン行く。「愛されている子どもらしく、神になら」いたいと願うからである⁴⁰。これが子とする御霊によるキリスト者の靈性である⁴¹。

³⁷ ヨハネ 3：3—8

³⁸ ローマ 8：15

³⁹ 十戒とエペソ 4：25—30 を比較せよ。

⁴⁰ エペソ 5：1

⁴¹ 水草修治『神を愛するための神学講座』第四版(いなもと印刷、2000年)、119—120頁参照

IV. 子とする御霊と教会と世界

1) 神の家族である教会

「神の子とする御霊」は、「神の家族」の一員としての自覚にとっても非常に有効である。義認において、キリスト者はただ独り被告として聖なる審判者の前に立つ。また罪の性質からの解放という意味の聖化においても、自分がどれほど清くなっただろうかと自己の内面に意識が集中する。このように義認と聖化の教理は、信仰の個人的側面に意識を集中させる。信仰生活において自己省察が重要なことはいまでもないが、もしそれだけであれば、信仰の教会的・社会的側面に目ざめさせ、喜ばしい奉仕に促すためには十分な力を提供するかどうか疑問である。

聖化において内的生活としての「きよさ」を求めるとき、教会における人間関係は、時には煩わしく感じられ、むしろ独り修行するほうが自己完成のためには有益と感じられるかもしれない。しかし、神の家族を捨てて、孤高の自己完成を目指す生き方には、むしろ異種の靈性の臭いがしなくもない。神を愛するとともに、兄弟姉妹を愛することに励み、時には、愛に欠けた己を打ち叩き涙を流し悔い改めつつ歩むところにこそ、聖書的な意味での聖化の実があるというべきではないだろうか。聖化の実とは、結局、神への愛と隣人愛とに尽きるからである。

御子の御霊により神の子とされたという恵みは、御子イエスを長子とし神を父と仰ぐ家族のうちに生まれたことを意味する。「子とすること」は家族的・教会的な祝福なのである。神は、あらかじめ選び、召し、義と認められた者たちを、神の家族という多くの兄弟姉妹のうちに招き、「御子のかたちと同じ姿」にすることを目指しておられる。御子のかたちを目指す聖化は、御子を長子とする多くの兄弟たちの中でこそ実を結ぶのである。「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認められた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」(ローマ 8:28-30) ヨハネもいうように、父なる神への愛と主にある兄弟愛は密接不可分なので

ある⁴²。

2) 子とする御霊と世界の相続

さらに、子とする御霊による靈性は、我々に世界に積極的にかかわる力と適切な態度を与える。子とする御霊による靈性は、厭世主義に陥りえない。なぜか。天のみならず地もまた御父の作品であり、父なる神は、その子どもたちに地の相続人としての責任を与え、神の戒めの限りにおいて被造物を享受することにより神を賛美することを望んでいらっしゃるからである⁴³。

「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人でもあります。」(ローマ 8:17)

アダムの墮落以降、被造物は虚無に服しているが⁴⁴、それでもなお世界は神のものであり、神はこれを保持し、神の子たちにこの世界を委ねておられる。だからこそ、主イエスは、「あなたがたは天の光である。天の塩である。」とおっしゃらずに、「あなたがたは世界の光である。地の塩である。」とおっしゃる。たしかに、被造物が、滅びの束縛から解放されて栄光に入れられるには、主の再臨を待たなければならないが⁴⁵、今、この時にも、御父は子どもたちに、被造物の管理を委ねている。

ただし世界の相続人としての責任を果たすにあたっては、「子とする御霊」のたまわる謙遜が重要である。己を神と僭称するサタンは、権力者に対して「もしひれ伏して私を拜むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」と誘惑し彼を自分に似た傲慢な者とする⁴⁶。我々は、被造物を収奪し続け瀕死の状態にまで追い込んでしまっている産業革命以降の大量消費文明の背景にも、サタンの影を認めて、神の御前で「土」に対する人の生き方、特に農と食

⁴² 1ヨハネ 4:20-5:2 参照

⁴³ A.ファン・リューラー『キリスト者は何を信じているか』(教文館、2000年) 70頁参照

⁴⁴ ローマ 8:20-22 参照

⁴⁵ ローマ 8:18、21 参照

⁴⁶ マタイ 4:8-9 参照

について再検討すべきであろう⁴⁷。

神の子どもたちは、十字架にいたるまで謙遜のかぎりを尽くされた御子の御霊を受けている。最後の晩餐の席上、主イエスは腰に手ぬぐいを下げて弟子たちの足を洗ってくださった。三年間の伝道生活をともにした弟子たちの節くれだった泥まみれの足をいとおしむように洗われた御子イエス。神の子どもたちは、あのお方の御霊を受けているのである。ゆえに、神の子どもたちは苦みうめく被造物世界から取奪するためではなく、むしろ被造物世界に仕えるためにこそ、これを相続するのである。ここにキリスト者が、神の子どもたちとして、環境問題に取り組む上での基本的な態度がある。「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。」⁴⁸

結び

以上、我々はナザレのイエスとして受肉した御子の御霊と、御霊によって神の子とされた恵みを軸として、聖書の霊性の諸側面について考察してきた。このことにより、異教的霊性との区別、義認と聖化の葛藤の解決、神の家族としての教会、世界の相続人である神の子の任務について、いささかの光が得られたであろう。神はナザレのイエスとして受肉された御子の御霊によって、我々に御父の愛を確信させ、兄弟愛に目覚めさせ、神の子どもとしての喜びと平安のうちに聖化と奉仕の生涯に歩ませてくださるのである。

「そして、あなたがたは子であるゆえに、神は『アバ、父。』と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。ですから、あなたがたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です」(ガラテヤ 4:6-7)。

(日本同盟基督教団・小海キリスト教会牧師)

⁴⁷ 水草修治「神と土と人」(東京基督神学校『基督神学』第十二号 2000 年所収)、87-88 頁参照

⁴⁸ マタイ 5:5